



#17

# きみのいる未来、いない未来

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

草馬家の朝はいつも喧嘩から始まる。

「もう信じられない！　なんでそんな大事な物忘れてくるのよ！」

「しょーがないだろ！　今気がついたんだから！」

トーストをかじりながら、草馬真は毎朝繰り返し返される両親の喧嘩をぼんやりと眺めていた。

「その書類がないと今日の契約とれないんでしょ!?　さっさと電車の忘れ物センターに電話したら!？」

「言われなくても、もうやってるよ！」

毎朝よく喧嘩のタネが尽きないなあ……と真は半ば感心しながらコーヒーを啜る。

常にマイペースな彼は両親のドタバタをよそに、ゆつくりとトーストにジャムを塗り、ゆで卵の殻を割り始めた。

ぷりぷりと怒る真の母・小春は頬を膨らませてまだなにやら文句を言っている。元々童顔な上に仕草が子供っぽいので、真と一緒に外を歩いていると姉弟に間違えられることもあるような母だった。

真の父・泰造は電話を終え、どうやら忘れ物を取りに行く段取りはつけられたようだ。

「とりあえず忘れ物センターに寄らなきゃいけないから俺はもう出るぞ」

「ちよつと待って」

「ん?」

小春は出かけようとする泰造を引き留めた。

そしてそのまま泰造の前でぐるりと一回転する。

真っ赤なシユシユで後ろにまとめられた艶やかな黒髪が泰造の目の前をふわりと通過する。

「どう?」

じつと泰造の顔を見つめる小春。その瞳は真剣だった。

「な、なんだよ?」

泰造は小春の行動の意図がまるで判らず、当惑した様子を見せる。

「……やっぱり忘れてる」

「また、その話かよ。今から取りにいくんだからもういいだろ!？」

「違うの!　そっちの話じゃないわよ!」

「じゃあ、なんだよ!?　何の話だよ!？」

「もう知らない!　泰ちゃんのバカ!　忘れ物センターでも迷子センターでも勝手に逃げればいいじゃない!」

またもや急に怒り出した小春が玄関先にあつたスリッパを拾って泰造に投げ始める。

「お、おい!　お前……ちよつと待てよ!　おかしいぞ!？」

「知らない知らない!」

ぱたぱたスリッパを投げつける小春は一向に怒りを取める気配を見せない。

さすがにこれはまずいと感じたのか、真もトーストをくわえたまま、ゆっくりと両親の方に向かい始めた。

「あ！ お前、それはいくらなんでも……！」

手持ちのスリッパがなくなつた小春は、ついに下駄箱げたばこの上に置いてあつた花瓶かびんに手をかけた。「泰ちゃんのパカー！」

「あ……」

小春が勢よく花瓶を振りかぶつたその時。

小春を止めに来た真のおでこ花瓶が、仲良くゴツンコと空中でこ挨拶あいさつした。

花瓶は盛大に割れ、中の水と蘭らんが乱れ飛ぶ。

「真!？」

「真ちゃん!？」

両親の叫ぶ声を聞いたのを最後に、真の意識はゆっくりと闇に沈んでいった。

「ててて……ん？ んー?」

痛むおでこをさすりながら真が目を覚ますと、そこは彼が通う学校だった。

市立三笠ヶ丘高校。  
みかさがおかしゅうこう

百年以上の伝統を誇る地元でも有名な進学校だ。

真はいつの間にか学校の下駄箱の前に座り込んでいた。

次々に登校してくる生徒たちが、ぼかんとした真を不思議な顔で一瞥いちべつしていく。

「あれ？ 僕……いつのまにここに?」

ポケットのスマホを見ると朝の8時10分。ただし……。

「1989年10月17日?」

日付表示が完全に狂っていた。今は2013年10月17日のはずだ。

「この前機種変したばつかなのに……もう故障したのかな……それとも僕、なんか変なアプリ入れたっけ……?」

「おい、草馬！ 何そんなところでぼーっとしてんだよ！ さっきからずっと浅葉あさはばが探してたぞ！ 早く教室行つとけ！ お？ 何それ？ 新しい携帯ゲーム機？ かつこいーじゃん！」

見知らぬ男子生徒が馴れ馴れしく真の肩に手をかける。

「あ、ありがと、すぐ行くから……」

さりげなく男子生徒の手を振りほどくと、真はそそくさと下駄箱から立ち去った。

（今の誰だったんだろう？ 全然知らない顔だったけど……っというか浅葉さんっというのも誰なんだろう？ こっちはなんとなく聞き覚えある名前なんだけどなあ……）

いつも通り1-Bの教室の前まで来ると、中から廊下ろうかまで聞こえてくる大声がした。

「もう信じらんない！ なんてそんな大事な物忘れてくるのよ！」

「しょーがないだろ！ 今気がついたんだから！」  
どこかで聞いたことのあるやりとりだ。

真はそっと教室の中を覗いてみた。

「今日の生物の自由研究発表のグループとりまとめノートは草馬くんの担当でしょ!? どうするの!? もう1時間目生物だよ!? 発表できないよ!?」

「わかってるよ、今から取りに帰ればいいんだろ!?」

「今から帰って間に合うわけじゃない!」

教室で激しく言い争う男子女子には見覚えがあった。

「というか。」

(なんで、僕があそこにもいるの!?)

真は目をぱちくりさせていた。

なぜならノートを忘れたと責められている男子がまったく自分と同じ顔をしていたからだ。

しかもその男子生徒は「草馬」と呼ばれている………?

「もう、知らない！ 草馬くんのばかー!」

「あつ、待てよ！ 浅葉ー!」

業を煮やして教室を飛び出す女子生徒。

廊下に佇む真の横を、怒りに満ちた歩調でずんずんと通り過ぎて行く。

彼女が真に気づく様子はまったくくない。

(あつ……)

すれ違いざま、真は思い当たった。

(「浅葉」ってお母さんの旧姓だ！ っていうことはこの二人、もしかして僕のお父さんとお母さん!? 確か二人とも高校からの付き合いだっけって記憶あるけど……え、ここ、も

しかして本当に1989年の世界なの!?)

真は状況を整理しきれずにパニくり始めた。

その時。

「ちよっと、真！ こっち来て!」

「あ痛たたたっ!」

「真はいきなり耳を引つ張られて廊下の非常階段の踊り場まで連れてこられた。

「いたたっ！ 痛い痛い！ ……って、あれ？ なんで美羽がここにいるの?」

突然目の前に現れた幼なじみを、真はぼかんとした顔で見つめた。

「なんでじゃないの！ 真、判ってる？ あたし達今、大ピンチなのよ!」

「大ピンチ？ なにが?」

「あーもー危機感ないわねー!」

腰に手を当てて怒っているポニーテールの美少女の名は石森美羽。

生まれてから16年、ずっと真の家の隣に住んでいる筋金入りの幼なじみだ。

「ほら、これ見なさい！」

言うが早いか、美羽が真の顔の前にはずい、と手をかざす。

そしてその手のひらは……何故だかうっすらと透けていた。

「うわー、すごいー、美羽ー。これ、どういう手品？ 僕にも教えてー」

「手品じゃないわよ！ あんたも自分の手を見なさい、自分のー！」

「え？」

促されるままに真も自分の手を見してみる。その手はやはり美羽と同じように透けていた。

「うわっ、いつの間に僕くんがすごい手品ができるようになったの!？」

「だから手品じゃないって言ってんでしょー！ タイムパラドックスよ。どういうわけでこうなったのかは判らないけど、このままじゃあたし達消えてなくなっちゃうわよ！」

「タイム……パトラッシュユって何？」

「タイムパラドックス！ あんた、そんなことも知らないの!？ たとえばタイムスリップして自分の親を殺すと自分は元から存在しなかったことになっちゃうっていうアレよ！ SFじゃ定番でしょ！」

「え？ え？ でも僕、お父さんもお母さんも大好きだから殺すなんて……」

「いいからあれを見て」

美羽は真の頭を両手で掴むと、そのまま強引に回転させた。

見るとそこにはさきほど教室を飛び出して行つた浅葉小春……つまり未来の真の母親……を校舎裏でなだめる男子高校生の姿があつた。

「あなたのママの横にいるのは石森聡。つまりあたしのパパ。あなたのママとうちのパパが仲良くなることで、あたしとあなたが生まれる未来の実存可能性が激減してるの！ だからこんな風に透けちゃつてるのよ！ 判る!？」

「うーん、なんとなく」

「もー！ なんとなくじゃないわよ！ あたし達が完全に消えちゃう前に早くなんとかするわよ！」

「なんとかするって、いったいどう……うわ、痛い痛い！ 耳引つ張らないでよ、美羽！ 痛いよー！」

昼休み。

真と美羽は結局肝心の「なんとかする方法」を見いだせないまま、無為に時間を過ごしていた。

校舎内に入ると（体が透けているため）幽霊扱いされて面倒くさいので、二人は体育倉庫裏から校舎の中の様子をうかがっていた。

「ほら、真！ なんかいいいアイディアないの!? 男の子でしょ!」

「男も女も関係ないよー。むしろタイムスリップって美羽の方が詳しそうだし、美羽こそなんかないのー?」

「んー、要するにあんたのパパとママが仲良くなればいいってことなのよね……」

美羽はあごに指を当てて思案顔になった。

二人の視線の先には屋上にひとり佇む草馬泰造の姿があった。

かなりへこんでいるようで、金網によりかかって先ほどから何度もため息をついている。

結局生物の授業では先生から大目玉を喰らい、泰造のグループ全員が補習を言い渡されてしまったのだ。

「ねえ、あんたのパパ様子おかしくない?」

「そう? どこが?」

「……」

「どうしたの? 美羽?」

「まさか、あんたのパパ、あそこから飛び降りたりしないわよね!」

「ええ!? まさか!」

美羽は真剣な顔で自分の手のひらを見つめる。

「さつきより透けてる……実存可能性がさらに下がってる……あつ!」

「え!」

美羽につられて真も屋上を見上げる。

そこにはひとり金網を登り始めた泰造の姿があった。

「ちょ！ 真、早く止めてきなさいよ!」

「止めるたってどうすればいいの!」

「いいからとにかく早く! このままじゃあんたのパパと一緒にあたしたちも消滅しちゃうわよ!」

美羽は真の耳をひねりあげるとそのまま屋上へとダッシュした。

「ああっ、もうあんな上まで登ってる!」

屋上に着いた二人が見たのは、金網の最上部に手をかけている泰造の姿だった。

「どっ、どどどどどうしよう、美羽!? このままじゃお父さん死んじゃうよ!」

「もう、四の五の言っでないでとにかくなんとかして止めてきなさい!」

「うわっ!」

美羽に勢いよく尻を蹴りだされ、真は前のめりの状態のまま、突っ込むように泰造が登っている金網の下に衝突する。

そして。

「はやまつちやだめだよ、お父さーん！」  
「うわっ!？」

真は必死の思いで泰造の体にしがみついた。

バランスを崩した泰造は真ともども、屋上の床に転がり落ちる。

「な、なんだ、お前!？」 うおっ……」

痛む後頭部を押さえながら立ち上がった泰造は、自分と同じ顔の、しかも透けている真を見てフリーズした。

「お、俺の幽霊……!？」

泰造は目を見開き、顔面蒼白になった。

こんな事態に遭遇すれば誰でもそうなってしまっただろう。

「え、あ、いや、それは違くて……えーと僕は……えーと……そうだ！ 僕は『君の中にある本当の君』だよ！」

「俺の中の、俺の……?？」

「そうだよ！ ふだん押さえつけている無意識がこういう形になって現れたんだよ！」

「……そうなのか？」

「そうなんだよ！」

(もう、真、馬鹿じゃないの！ そんな説明で一体誰が納得するっていうのよ！)

屋上へ続く鉄扉の陰から、美羽が歯噛みしながら二人の様子を見守っている。

「そうか、お前は俺なんだな」

「そう、僕は君なんだよ」

真と泰造はにっこり笑って握手をした。もともと似た者同士、早くも意気投合したようだ。

(……真も、真のパパも、アホで助かったわ……)

美羽はほっと安堵のため息をついた。

「でもだめだよ、お父さ……じゃなかった、泰造君。自殺なんて考えちゃ」

「自殺？ 俺はただあそこのスズメを助けようとしただけじゃ？」

「え？」

見ると金網のてっぺんのところ、どうした案配か足を挟んだスズメが動けなくなってばたばたと羽根を動かしているのが見えた。

「よいしょっと」

泰造はもう一度金網を登ると、金網がほつれた部分を開いてスズメを逃がしてやった。

「なんだ、そういうことだったのかー」

真はほっとして、空に消えていくスズメを見送った。

「でも、俺の中の俺ってことは……今、俺が何を考えてるかも判るんだろ？」

「え？ あ、ああ、勿論さ！」

「俺、どうすればいいのかな……よりによってこんな日に浅葉を怒らせちゃってさ……そんな気は全然なかったのに……」

泰造は心底落ち込んだ顔で、またがっくりと屋上に座り込んだ。その姿を見て、真も胸が痛くなってくる。

「せっかく買ってきたけど……これ、捨てた方がいいかな……」

泰造は眩くらきながら、ポケットから何かを取り出した。

それは5センチ四方の小さな箱で、花柄はながらの包装紙と赤いリボンで丁寧ていねいに梱包くわくされていた。

「あつ……それ、もしかして、中身は赤いシユシユ？」

「おう。さすが、俺、よく知ってるな。昨日からこいつを浅葉にどうやって渡したらいいか考えてたら他のことが手につかなくなっちゃってさ。それでノートも忘れちゃったんだよ」

途端とたんに真の中で様々なことが繋がった。

10月17日は浅葉小春の誕生日であり、同時に小春と泰造の結婚記念日でもあるのだ。

「……やつぱり忘れてる」

朝、拗こねた顔をして小春が口にした台詞が真の脳裏のうりに甦よみがえる。

小春は自分の誕生日と、そして結婚記念日を同時に忘れていた泰造を責めていたのだ。ならば。

「それ、捨てちゃだめだよ！ すぐにお母さ……じゃなかった浅葉さんにプレゼンしてあげ

なよ！」

「でも、なあ……」

「大丈夫！ 浅葉さん、それ、絶対気に入るから！ 10年も20年も、大事に大事に宝物のようにしてくれるはずだから！」

「本当か？」

「本当だよ！」

泰造は手にした箱を見つめたまま、しばらく考え込んだ。

だが、やがて意を決した様子で顔をあげた。

「そうだな。俺が言うんだから間違いないよな。よし、判った！ 俺、行ってくるよ！」

「うん、頑張つて！」

真は走り出した泰造の背中に励はげましの声をかけながら手を振って見送った。

「うまく……いくよね……？」

「やったじゃない！ しーん！」

「うわっ!？」

真がバランスを崩したのは、美羽が突然後ろから抱きついてきたせいだった。一体いつの間  
に真の背後に来ていたのか。

「ほら、見てみなさいよ！ あたし達透けてないわ！ 実存可能性が戻ってきたのよ！ やっ



ほー！」

「あ、ほんとだ……！」

真は透けていない手のひらをしげしげと眺めた。

こんなに当たり前のことが、こんなに有り難いと思ったことは初めてだった。

「さあ、あとは現代に帰るだけだわ！　じゃ、早速行きましょ、真！」

「えっ、行くってどうすればいいの？」

「大丈夫！　実存可能性だって取り戻したんだから、真ならきつとできるでしょ？」

「そんなー無責任なー僕だっつてどうやって帰ったらいいか全然判んないよー」

「なによ、あんた男の子でしょ！　だったらこういう時は『黙って俺についてこい！』ぐらいの甲斐性見せなさいよー」

「だから男の子も女の子も関係ないでしょーこれはー。さっきのだって全然自殺じゃなかったしさー。そーゆーとこいつつもいー加減なんだから、美羽はー」

「なによ！　あたしが悪いっつて言いたいわけ!？」

「そうじゃないけどさー。美羽っつていつつも行動が行き当たりばったりなんだもんー」

「なによー！」

「やめて！」

いきなり美羽でもなく真でもない、透明なソプラノの声が響いた。

声のした方を見ると、ツイテールの小学校低学年ぐらいの女の子が頬を膨らませて二人を睨みつけている。

「二人ともケンカはやめて仲良くして！　そうしないとあたしのジツヅンカーンが下がっちゃうでしょ！」

「えっ……！」

美羽と真は顔を見合わせ。

そのあと何故かふたりとも顔を真っ赤にして黙り込んでしまったのだった。

おしまい